

山田みやこの活動報告

令和2年1月30日(土)

生活困窮世帯の児童生徒への学習支援の取り組みについて話を伺った

埼玉県 社会福祉課 生活困窮支援担当 堂園主幹
彩の国 子ども・若者支援ネットワーク 白鳥 勲氏 より

アスポートとは「明日へのサポート」と「明日に向かって船出をする港(明日+Port)」を組み合わせた造語。

埼玉県では平成22年9月から全国に先駆けて、中学生の高校進学支援のために5教室で学習支援を開始。平成24年度には全国知事優秀政策として表彰された。さらに平成25年度には高校生が中途退学しないで卒業できるようにするため7教室を開設。平成27年度には貧困の連鎖を断つために、全国一斉に生活困窮者自立支援事業の学習支援が開始された。

埼玉県においては、平成21年度生活困窮世帯の高校進学率が86.9%、学習支援事業を開始した平成22年度は97.5%とグーンとアップした。さらに平成24年度の高校生対象の事業開始前の中退率は8.1%、平成30年度は1.2%まで減少した。平成30年度は中学生教室101教室・1609名(63市町村)、高校生教室52教室・499名(55市町村)を運営している。大変効果のある事業として捉えている。

さらに平成30年度からジュニア・アスポート事業としてモデル事業を開始。小学校3～6年生を対象に週3回、予習・復習+宿題の学習支援と生活支援(整理整頓・身だしなみ)、体験活動(キャンプ・工作・職業体験)、食育(調理・片付け)を行っている。

令和2年1月現在、5市7町8教室、開催場所は公的な施設。

ジュニア・アスポート事業開始の理由は、生活保護世帯の子どもは小学3年生くらいから学力の低下がみられ、非認知能力(頑張る力)も約10%の差がみられる。学習の分からない部分をそのままにして、中学2～3年まで放っておけば非認知能力は上がらず、自己肯定感もなくなっていく。差が出始めた頃から支援が始まれば、学校生活も有意義に過ごすことができる。1教室25名、大学生ボランティア・教員OB・シニアボランティアなどのスタッフで構成され、協力団体は子ども食堂・フードバンク・高齢者サロン・児童センター・社協・JA・生協・民生児童委員協議会・企業(コンビニ・球団・損保会社・バス会社)など。

アスポート学習支援事業10年の取り組みを実施してきた県の委託先の「彩の国 子ども・若者支援ネットワーク」の白鳥氏の報告。

【貧困世帯の子どもが抱える困難】

- ①親以外の大人たちとの関りが少ない(温もりある支え)
- ②中学生の半数は小学3～4年生での学習でつまづきがある(基礎学力が育たない)
- ③登校準備(身だしなみ・朝食・宿題・連絡帳・登校時の送り出し)の不十分さ
- ④同世代・異世代の仲間とのつながり
- ⑤困ったときに助けを求める・質問できる力
- ⑥困難を乗り越える力(非認知能力)
- ⑦不登校・発達障害の疑い



【貧困世帯の保護者が抱える困難】

- ①生活保護・ひとり親家庭(6～7割)
- ②精神疾患・DV被害者

支援対象児童は生活保護世帯、子ども支援担当課や学校から支援依頼された世帯、要保護児童対策地域協議会や市町の相談窓口から来た児童で、ケースワーカーによるアセスメントと送迎の有無を確認する。

特別支援学級など児童の状態に合わせた指導、マンツーマンで、多くの児童は最初は声を発することができにくい
ため合唱や演奏・ゲーム・本の読み聞かせ・工作なども行う。週3回なので土曜日を利用して農業体験・モノづくり・調理体験・自然体験、長期休暇には宿泊体験も実施。

食事や健康支援として、栄養バランス・偏食の克服・手作り料理など地域の方の協力で子ども食堂での調理体験と後片付け・会話のある食事・食中毒予防・アレルギー対策なども行う。

送迎が一番の課題(ファミリーサポート事業で低額で依頼、送迎用ボランティアの確保が困難)。しかし保護者との会話から信頼関係が築かれ虐待防止に繋がったり、関係機関との連携で支援の充実が図られている。(福祉関係・学校関係・SSW等)

1教室に子ども10～13人、支援スタッフ8人。予算は1教室1,000万円(国の補助+県費)

現在、生活保護世帯の48%が利用しているが60%を目標としている。要保護・準要保護世帯は分かりづらいが、潜在的にはまだ多数の児童が支援を必要としている。

大学生ボランティアは交通費のみ支給。大学の教育学部と協定して10回の参加で1単位取得できる。多くの大学がある埼玉県ならではの取り組みと思われる。

教室を利用した児童の変化としては、不登校から再登校にできるようになった・あいさつができるようになり表情が明るくなった・大人に質問をするようになった・お手伝いができるようになった・勉強や宿題をやるようになった・悩みを相談するようになった・友達を思いやるようになった・落ち着きを見せ自分をコントロールできるようになった・我慢強くなった・テストの成績が良くなった等。

保護者の変化は、孤立からの脱却・子どもの頑張りを見て自分自身も元気になった等、保護者への支援としても効果が出ている。

課題としては送迎ボランティアの確保。送迎が困難なことを理由に参加枠が狭まることにならないよう工夫が必要。

※丁寧な支援の取り組みと何といても温もりのある大人の関わりで、子どもと保護者への支援が行われている。予算をしっかりと取って早い段階の支援により将来の困難を少しでも少なくする重要性・必要性を感じた。
本県ではすべての市町で学習支援の取り組みはされているが、学習支援員の確保・送迎の問題(距離が長い)・予算減などの課題が地域によって差が出てきている。

